



第123号

発行所 上高井教育会  
発行人 上高井教育会長 雄  
小林 義雄  
編集人 会報編集委員 長  
中村 幸雄  
印刷所 須坂新聞社

# 第九回研究発表会・第八回女教師研究大会

## 継続実践の研究発表

十一月二十一日(土)須坂小学校視聴覚室において、会員百三十余名参加のもとに、第九回研究発表会が開催された。この研究発表会は会員の普段の研究成果を発表することを通して、自己練磨に務め、会員相互の資質の向上に寄与するべく役割りを担っている。本年度は四名の先生により確かな実践と興味深い発表がなされた。

十一月十四日(土)には女子会員等百余名の参加によって同じ須坂小学校視聴覚室を会場に、多くの会員の展示作品のなか、第八回女教師研究大会が意義深く開催された。

第九回研究発表会は晩秋の暖かく穏やかな土曜日の午後、小林会長はじめ会員百三十余名が出席するなか午後一時半から、一人二十分の持ち時間の中で、ビデオや自作の資料、プリントを効果的に利用しつつ発表が進められた。最初は「読書指導について」という演題で、田中尚子先生(旭ヶ丘小)の発表。家庭とも連絡しあって、いかに

子供に読書について興味や関心を持たせるかについて発表があり、小説を劇化して発表させた事例がビデオで紹介された。

二番目は「小学校における書写指導の方法」と題しての塩原義郎先生(仁礼小)の発表。楽しみつつ自分の文字が書けるように遊びの要素を取り入れながら筆の持ち方から筆順に至るまで、小三から小六までの長い指導の実践結果の発表であった。

三番目は「フランドル学派におけるポリフォニーと現代音楽」と題しての内山満先生(高山中)の発表。静かな美しいメロディや力強い合唱曲を録音で紹介されながらヨーロッパの歴史を随所に混じえての楽しい発表であった。

音楽が、民族とその歴史に深い関係があるということに改めて知らされた発表であった。四番目は「良寛と童心」と題して山崎昌先生(墨坂中)の発表。良寛の思想の背景や人となりについて、求める教師像に通ずる面が見られるという趣旨の発表であった。

女教師研究大会も「子どもの理解をとおして」と題して女教師委員会委員による実践報告があり、つづいて「研究所で学んだこと」と題し会員市川和恵先生(仁礼小)の意見発表がなされ、その後、松本市立清水小教頭の西沢松美先生の「子どもとともに」の講演が行なわれた。

いずれも会員が熱心に聞き入る充実した会であった。

## 読書指導についての一つのこころみ

田中尚子

現在四年担任で三年からみている学級のT・H児を中心に、家庭でのとり組みについて触れ広く読書指導についての考えを書かせていただきます。

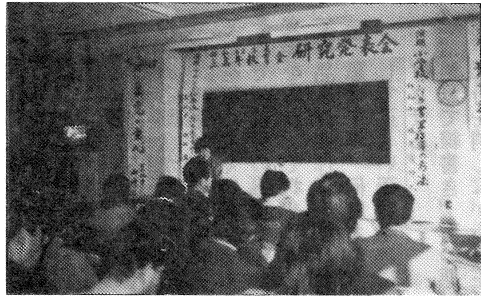
T・H児はどこの学級にもいる運動が好きな子である。しかし読書経験は少ない子で、好んで読む本は活字が少なくさし絵の多いものでそれもなくさきでしようところがあつた。そこでブックレビューというVTRに知らせたい内容を吹き込むことでの読み聞かせを、数回行った。と同時に感想メモをとらせた。この方法だと活字を追うのがにがな子でも興味をもち聞くだろうと考えたからである。「おばあちゃんのヒマワリ」から始めた。祖母の手製のおにぎりをおやつにしたこと。繕ったズボンを喜んで話した話。縫い物をする祖母を作文や絵に何回も書いたこと等から、T・H児と祖母とのかわりの深さに担任として感動したからである。祖母の孫に寄せる願いは、担任への指導ともなつた。「あれはいい方法ですなああしてかん字を覚えればみんな字が書けますよ。」などの話も祖母から聞き、担任と共に話の裏に流れている心の暖かさをありがたく感じた。心をこめた読書指導をしたいとの願いを強くもつた。ところがその後のT・H児の感想メモはあらずしがほとんどで興味をもつて聞いているようには感じられなかった。本が適当だったか。読み聞かせの仕方がどうだったかと考え、ページを増やして読み聞かせていく方法をとってみた。それでも「読もう」という方向へは向いていかず、祖母を中心にすえた本を扱うことをひとまずやめることにした。

「耳なし芳一」や「すいかの種」のような事件の要素を多く含む本を次に考えた。今度は内容がとぎれないように続けて読みかかせた。メモの中に、「耳をとられてもぎぜんを組んで動かないでがまんをしていたところ」とか、「家族一人がいないとまずいだらう」などの感想で、好んで読んでいったことが伺われた。

感受性の高い子であることもわかってきたので、この子自身活躍できる場を与えたいと思った。

その後、「ごんぎつね」の兵十の役をやることにクラス全員で決まった。練習中や本番でのせりふ練習を重ねる中で、T・H児なりの感情の受けとめ方があることに気づく動物好きで、自分がそこへかわる時恥ずかしさが伴うことは、兵十がごんを助け起こす場面(劇の中)にでていた。反面、「月の輪グマ」の「母グマが落ちてもすぐたれたたれたれです。」ばくもそんなじょうぶな体になりたい。「で、体にも興味のあることを教えてくれた。この頃「シロ」とたけしを自分でかりてきた。活字よりもシロのさし絵にひかれてかりたよう、書くことの大切さを感じた。「読みのカード」を作り思いつくことをどんどん書き書く力もつきたいと考えた。その後、T・H児に与える本を考慮した。祖母ともお逢いし、身体の不自由さにめげず明るく生きていく本「新ちゃんがないた」や、伝記で生き方をみつめてほしいと続けて読み聞かせている。読まない子への環境づくり、出回る出版物の選択をする力を、自らがつけていくことや家庭蔵書にも心を向ける等課題は多い。たえず、自分も個々の子どもたちの為に読んでいます。

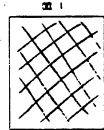
(旭ヶ丘小)



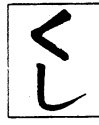
# 小学校における 書写指導の方法

塩原義郎

礎を身につける。  
評価は、子どもが書いている過程で行い、直すところは教師が背後から手をとっていっしょに書いてやるようにすると効果的であった。



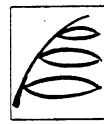
筆に慣れたところで、ひらがなの指導に入った。ひらがなは、起筆や終筆にそれほど神経を使わなくても良いのでダイナミックな運筆ができる長所がある。また、絵文字と組み合わせることで、文字としてかっこよく書こうという意識をなくし、のびのび楽しみながら書くことができる。



絵文字の「かめ」「くし」との組み合わせ指導のポイント  
トは次の通りである。  
一、かめの頭としっぽの用筆に焦点をあてる。書き出しは上からおさえるだけとし右払いは体全体で大きくはらう。  
二、「くし」はかめの一部をとり出したつもりで書かせる。  
三、半紙一枚に一回だけ書くようにし、十枚以上は書かせる。

(二) 漢字の指導  
漢字はひらがなに比べて抵抗が大きい。原因は、用筆のむずかしさと形の整え方のむずかしさがあげられる。指導で心掛けたことは、用筆につ

いてはできる限り単純化してわかりやすく与えること、字形については、子供が自分の力で気づいて整えられるようにすることであった。  
漢字指導の初めは「二二



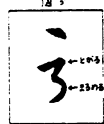
の場合が多いと思われる。用筆のポイントは起筆と終筆である。  
一、筆先を整えて45°にいれる。  
二、そのまま力を抜かず横に引く。  
三、止めたところで三つ数えて真上に筆を上げる。おさえたり、こねたりしない。

字形のポイントは「二二」の第一画のそりである。これは腕の自然な動きと逆の動きが要求されるため、大変むずかしいようだ。絵文字は「はっぱ」と組み合わせ、そり方のちがいをつかませるよう指導した。

しんのようなように細かくて複雑な用筆は、鉛筆では指導しにくい。毛筆でわかりやすく教えると、それが硬筆にもいきでくる。  
一、図のように二つに分けて指導する。  
二、右払いは①②③の三つの直線で構成する。  
三、最後は勢よく払う。



高学年になると字形の指導の占める割合が大きくなる。「飛」の字は、子どもにとって形を整えにくい文字である。そこで、自分の感覚で整った文字を作り、それを手本として作品を作る作業を試みた。  
一、筆順指導。何度もくり返して正しい筆順を身につけさせる。  
二、鉛筆で線書き。形の悪い部分を消しながら修正。  
三、白ぬき文字を作る。起筆、折れ、点の形など修正。  
四、ぬりつぶして手本完成。  
五、自分の手本を臨書する。  
自分で一度書いた文字を直していくうちに空間のとり方がわかってくるようである。また、折れ、点などぶだんあまり気を使わない部分にまで目がいくようになった。



(三) 硬筆にいかせる指導  
研究発表会の後、教育会会長の小林先生の言葉が、いつまでも頭の中に残っています。それは「自分の目をひらく」ということです。自己研修の大切さを常々耳にしますが、目先の仕事に追われ、むずかしことだと、半ば締めかけておりました。  
そんな折、先生方の研究発表を聞く機会が与えられました。内容は様々でしたが、その底には、研究を何とか子どもたちに生かそうとする先生方の熱意と愛情が流れているのを感じ、温かい思いに包ま

八町希代子  
研究発表会へ参加するのは初めてだったので、当日、会場へ行くまで、それぞれ発表者が別々の会場で発表を行うものかと思いきや、発表の順番は、発表の順番に決まっていた。そのため、自分が聞きたいと思う発表だけを聞けば良いのだと思っていました。それが実際に会場に入ってみて初めてどのような順番で発表が行われるか理解したような次第で、我ながら情けないはじまり方をしました。  
出足は、このようにあまりよくありませんでしたが、各先生方の発表を聞いて、学校

## 研究発表会に 参加して

高野明美

れました。良寛の長歌、短歌を通して、子供達とのほのぼのとしたかわりあい話を下さった山崎先生。子どもが本を読んでいる姿を大切に、何とか一人読みができるようにと願う田中先生。絵文字を取り入れて達筆な筆さばきを見せて下さった塩原先生。十四世紀、ヨーロッパで歌われた素朴なポリフォニー音楽を紹介して下さいました。先生方の姿を見て、私も何か(自分のテーマを)と目を開かせていただいたと思います。

(高山小)

# フランドル楽派の ポリフォニーと現代の音楽

内山 満

一、はじめに  
フランス北部からベルギーにかけて（一帯をフランドル地方とよぶ）、ふるくから産業や文化が栄えていた。特にブルゴーニュの歴代の公爵たちはみな熱烈な美術や音楽の愛好者であり、それぞれ礼拝堂楽団（作曲家、歌手、楽器奏者）を持っていて音楽を楽しむと同時に音楽家達に好ましい刺激を与えていた。

十四世紀末頃イギリスからダンスタブル（一三七〇—一四五三）がイギリスの音楽家たちとともにフランスに渡り、ひびきのよいイギリス音楽を大陸に伝えたのである。それをフランドルの音楽家達はよく研究し精密に組み立てフランドル楽派のポリフォニーとして作り上げ、多くの音楽家達がそれを携えてヨーロッパ各地に渡りそれを広めた。その本来の素朴な味わいにイタリアの豊かな色彩感覚をプラスして、洗練されたポリフォニーができた。その作曲家達とは  
ジルバンシヨウ  
ギヨームデュファイ  
ジヨスカンデブレ  
ハインリヒイザーク  
その他多くの人達であり、ローマ、ヴェネチア、ドイツ等、ヨーロッパ各地で活躍し、偉大なるフランドル楽派を産み出したのである。このフラ

和声構造はIV、I、IIなどが多く現われ、Vは途中で現われてもすぐにIの和音の中に消えてしまう。終止もこの通りでドリア調の終止音と属音である。「目ざめよ聞きたまえ」がアルトとテノールソプラノとバスと受けつがれ、各パートが自由に動きまわり和声の枠、リズムや小節線の枠にとられない楽しさがある。又、各声部の線がからみ合い、追いかかけ合い、うっかりすると自分の旋律を見失ってしまうスリルもある爽やかさ、新鮮さがある。

(2) 宗教性と世俗のロマンとの調和  
今までのグレゴリオ聖歌の束縛からはなれて、恋、愛、自然等を自由に題材として歌いあげている。しかし、マリアへの讃歌、ミサ曲等の名作もあらわれ宗教性も深く根をおろしていることをもうかがわれる。

これら二つの点は地方的なあるいは一時的な重要性を持つものでなく音楽芸術の永遠の特質の発見である。

四、まとめとして  
このポリフォニーの素朴な美しさは、難し複雑さがなくとも充分に発揮できること、又、旋律線の美しさの強調と、どの声部も独立性を持ち、歌う喜びを主張できることは、あわせて、学校教育の面に深い示唆を与えており、これらを尊重して作曲をするならば必ず児童生徒の共感を得るものがあるろうと信ずる。

(高山中)



夏休み後、水泳記録会がありました。学校の一日も休まず水泳の授業も一回も休まず練習し、クロールで25メートル泳げるようになった時は、みんなで大よろこびをしました。その前日「先生、お父さん病院へ入院しちゃった。」とN児から聞きました。すぐ教頭先生、校長先生に相談し、

### 女教師研究大会

## 「がんばれ N君、

### 西沢 朋子

N児との出会いは、入学式の日でした。父親に手をひかれ丸い大きな目と「先生！」といってとびついてきました。人なつっこく明るい子のように見え、入学して、新しい持ち物に名前がしてあります。算数セツトも家に持ちかえったのですが、記名がなく私と二人でつけることにしました。とてもよろこんでいました。

また運動着や給食着の洗たくも「お父さんが、あらわなくともいい。」といってそのまま持ってきました。「先生もあらうので、いっしょにあ

らってくるね。」とあらってくるとうれしそうでした。二時間目が終わる頃「先生おなががいたいの。」といってくるのであります。「給食まだ。」と待っていることもありました。給食を食べると、治ったのできとおなかがすいていたのとおなかがすいて、推進教員の先生のところへ進んでカードをとりに行き「Nちゃんは、よく覚えていてえらいね。」とほめられました。

家に帰るとすぐ学習センターに行っていました。家で一人父を待たさみさか友だち関係では、ちょっと友達にちょっとかいを出し、トラブルを起こしました。友だちに係わりたい、かまって欲しいという表現だったのかもしれない。

夏休み帳も「どっかにいってしまいました。」といひにきました。やっとなかったの悲しいうそをついたのかもしれないし、もう少しN児に課題の出方を考えてあげればよかったと反省しています。

夏休み後、水泳記録会がありました。学校の一日も休まず水泳の授業も一回も休まず練習し、クロールで25メートル泳げるようになった時は、みんなで大よろこびをしました。その前日「先生、お父さん病院へ入院しちゃった。」とN児から聞きました。すぐ教頭先生、校長先生に相談し、

民生委員の方に連絡しました。福祉事務所の方も来られ話し合い、いろいろな事情で、福祉寮へ行くことになりました。

前日、N児と私でダンボール箱に下着や洋服、学用品等持っていくものを整理したり足りないものなど用意しました。用意する時は、明るかったN児も、子ども会でお別れ会をしてもらった時は、大泣きをして帰ったようです。

表面では、明るくみえてもN児の心の中にあるさみしさ、悲しさがわかったような気がしました。

次の日、参観日だったのでいっしょに寮へ行ってあげられず、次の日曜日にN児をたずねました。寮の先生が「Nちゃんに新しい小学校へ行く時『川の中のカニをつかまえて』といわれたのでカニを二匹つかまえてあげました。」と話されました。また電話を入れると「今日は、たん生日会をしてもらっているよ。みんなからプレゼントももらった。」と話してくれました。

九月下旬、父親が仮退院しました。いろいろな事情で、もう少し寮にすることにしました。

N児にとって、家庭環境、生活環境にいろいろ変化がありました。それら乗り越え、たくましく生きる力をつけていって欲しいと願っています。これからもN児を暖かく見守っていきたいと思います。

(井上小)

# 研究所で学んで

市川和恵

教職について二十年。その間に多くの子もたち、父母、先生方と出会いました。新卒当時、温かい支えの中にいながら、「先生」と呼ばれるたび、その言葉の重みに何度、胸が痛んだことでしょうか。人間としての未熟さ、教師としての非力さは、ベテラン教師に囲まれる中で身にしみましました。最近では、「先生」と呼ばれることに慣れ、授業もマンネリ化し、このまゝ、続けていくことが苦痛になっていました。

そんな折、「算数における『小数の壁』の問題の追求」という研究テーマを通して、情性に満ちた自分自身を省み、そのために子どもたちが、どんなに迷惑していたか現場を離れてみつめるよい機会を得ました。

信濃教育会教育研究所は、昭和二十二年に、学問の自由をうたい創立以来、四十年の歴史を持つ全国的にもユニークな研究機関だそうです。毎月一回、以前研究所長であられ、現在、都留文科大各々長をされておられる、上田薫先生が指導に参ります。そして教師の在り方、子どもとの関係、授業の変革についてなど深く広い立場から、示唆してくださいいます。また、五名の所員の先生方は、それぞれの個性的な味を生かされて、私たちが授業参観などから得た

では、小数点をええろえれば計算ができてマルがもらえた。しかし、五年生になって小数乗法になると、整数で成り立っていた関係判断をどうしても小数でも同じように使えないと思えない。小数をかけることへの抵抗が大きいので様々な混乱をひき起こす。「壁」は、乗り越えて初めてその人の力となる。どう乗り越えさせればよいのか。私は壁の実態を探りながら、拡張行為の積み重ねを、整数段階から示

では、小数点をええろえれば、計算ができてマルがもらえた。しかし、五年生になって小数乗法になると、整数で成り立っていた関係判断をどうしても小数でも同じように使えないと思えない。小数をかけることへの抵抗が大きいので様々な混乱をひき起こす。「壁」は、乗り越えて初めてその人の力となる。どう乗り越えさせればよいのか。私は壁の実態を探りながら、拡張行為の積み重ねを、整数段階から示

## 女教師研究大会に参加して

岡村博子

(仁礼小)

まず、会場に入ってみると、まずは、会場に入ってみると、まずは、会場に入ってみると、まずは、会場に入ってみると、

まずは、会場に入ってみると、まずは、会場に入ってみると、まずは、会場に入ってみると、

## 郷土の文化財 ⑧1 荒井原養蚕神社

高山村 荒井原



(高井鴻山大幟写真集より 小布施町教育委員会)

この幟は、鴻山七十五歳(明治十三年)に書かれた。筆力剛健、氣品に溢れた書。鴻山は、母親の出が高山村堀ノ内の高井家である関係で高山村には鴻山の作品がいろいろ残っている。この幟も堀ノ内の高杜神社の幟の書かれた次の年に書かれたもので、長さ九・八五米、巾〇・九二米の一对をなしている。(田中)

## 編集 後記

「第九回研究発表会」そして「第八回女教師研究会」の特集として、一、二、三号をお届けすることができました。二学期末のお忙がしい中、心よく原稿をお寄せいただいた

(田中・山岸)